日隆聖人の寿量本佛観

株橋諦秀

この小論は昭和三十九年十月三十日、立正大学の第十七回日蓮宗教学研究発表大会に於て、「日蓮門下教学の諸問題」の一として発表した折の原稿に若干追補したものである。

目次

一、序……二
二、三身即一の正在報身について……四
三、報身の本因本果について……六
四、五百塵点の経旨について……八
五、本佛釈尊は色相荘厳の佛……一三
六、久成本佛の報命は久遠……一六
七、結……一八

一、序

日隆聖人は南北朝末期の至徳二年（祖滅一〇四）の出生より、足利室町時代中期の寛正五年（同一八三）の入滅に至る八十年の生涯の中、後六十年は研究・布教・著作に専念し、その出すところの著述は実に三百数十巻、この全著述がまたすべてわが法華教学に関する宗義書にして他に関するものは一もないことは、日蓮大聖人門下に於ける随一の宗学者といわなければならない。

隆師の出現せられた時代は、わが日蓮法華門下に於ては中古天台心酔時代と称されている時代で、身延・中山・富士・京洛の諸山等関東関西の各門流の殆んどが、西の比叡山か関東の仙波に学び、中古天台の教学の採容と研究に狂奔し、遂には天真独朗の理本覚説を以て宗祖大聖人の重要御抄を解して平然としているが如き、能所・本迹顚倒を敢てしていた実にわが法華教学界は滔々として中古天台謳歌時代であつたといえよう。

聖人自ら弘経抄九八（隆全一〇四〇七）に

理の本迹と云ふは法・応に約する体用本迹なり。故に本と云ふも法中論三の秘密の三身を以て本と為す。故に爾前・迹門の法身の理本に通ずる故に迹本一致なり。……謂く天台宗所談の本迹是れなり。……

此の本迹は諸御抄に斥ひたまふなり。天台宗の諸聖教に之を賞翫し口伝して二・八帖抄を深秘と為す。仍て諸法華宗此れを相伝して諸御抄の肝心と為して末法下種を成ぜんと欲して思はず量らず謗法と成り畢んぬ。

といつて、当時の諸門流の謗法を指摘せられている。

この無作本覚の絶待思想を肯定する限り、一方教学思想の面に於ては、当然能開所開の本迹勝劣を迷乱する非差別

悪平等の思想が主張されるし、他方実践面に於ては、煩悩即菩提・生死即涅槃の実修否定の本能主義が唱えられ、遂には外道を破して佛教を樹立された佛陀釈迦を、三大部に於て南北諸師を批判せられた天台・妙楽を、還つて開会観心主義の立場より謬なりと非議し、並に叡山に女犯肉食を禁制された伝教大師をも、無作本覚の行者にあらず始覚の行者なりとまで破斥するが如き、祖師違反の謗法が生ずるに至つたのである。（以上隆全八の六三往見）

かかる宗義晦冥時代に出現せられた日隆聖人は、宗祖の中古天台破斥の真義を体し、佛教と申すは道理なり、道理とは能所本迹の勝劣なりの大聖人の相待主義を唱導し、当時の謬れる諸法華宗の本迹一致、開会観心悪平等の絶待思想を排して祖道に導入せんとせられたのである。聖人は

此の八品の意は絶待の上の相待妙と見へたり。乃至当に知るべし、本門は絶待を廃して相待を建立せり。（宗全一二九九）

と説き、この相待義を更に委しく表現して

是れ本迹雖殊不思議一、雖一而本迹宛然と云へる本迹宛然の上に本門法華宗を立つ。是れ即ち同が上の異、一が上の勝劣、不二が上の而二、不変が上の随縁、理極が上の事行、無相が上の有相、難行が上の易行なり。此れを教弥実位弥下の本門と云ふなり。（隆全七三九八）

とて徹底的に絶待の上の相待主義を強調せられている。これが隆師教学の根本思想である。本門の経説は実にこれを顕すものであつて、聖人の主張する本門八品はこの絶待の上の久遠本時の相待的事相世界、即ち俗諦常住の消息を明し、而もそこに能所本迹の勝劣の存することを顕説せる経教である。さればこの義を単的に表示せんが為に、聖人は「なか〳〵に尚里近くなりにけり、あまりに山の奥を尋ねて」という古歌を引用するを常としている。

従つて隆師の寿量本佛観もこの絶待を超えた相待主義の根本思想を以て立論せられたものに外ならない。故に隆師

が三身の中には報身を以て中心主体となし、報身本佛の中に三身を論ずることは、もとより宗祖日蓮大聖人の重要御書の指南に基くものであることは論ずるまでもないが、天台大師以来妙楽・伝教等の法華教学の正統を承継し、宗祖大聖人死身弘法の正義を解釈し唱導せられたのである。この故に隆師の教学に於ては、当時流行の中古天台の自然本覚の思想に対しては徹底的に批判破斥こそすれ、一毫微塵もその影響を受けていないのである。ここを以て隆師を評して教相至上主義の学者だとする者があらば、その評者こそ中古天台の観心主義に惑謬されているものであろう。

二、三身即一の正在報身について

聖人は寿量顕本について、本門の正意は三章の中には宗玄義であり、宗玄義は三身の中には報身に当る。天台大師が「此品詮量通明三身若従二別意一正在二報身一」と釈せられた如く、寿量品の大意は本地三如来の寿命を詮量するにあるが、若し別していうときは三身の中には報身の寿命を詮量するにあるとする。天台が正在報身を説くに当つて義便・文会の二義を以てせられたが、隆師はこの解釈に拠つて報身には上冥下契の徳があつて三身宛足している。法身には上冥の徳ばかりで只本の徳のみあり、応身は下契の徳ばかりで只迹の徳のみであるが、報身には上冥下契の義があつて本迹の徳を具備して三世に亙つて衆生を益する。また法身は無相の佛にして説法なく、応身は説法すれども無常佛にして一世に限る、多世に亘つて随縁化度することを得るのは報身の久遠なるによるのである。爾前・迹門に於ける報応佛は所開にして有為無常なる故に、衆生に熟益と少分の脱益を与えるけれども下種の義がなく、従つて化道の始終、種熟脱の益がない。それ故に一切衆生の本尊とはなり得ない。然るに本門久遠の報身佛は能開にして長寿を以て三世常恒に広大の利生を施し、生々世々に三身を示現し以て種熟脱の化道を為すのである。それ故に三世通じて衆生

成佛の手本としての本尊となる佛は、この報中論三、正在報身の本佛釈尊であるというのである。（以上、隆全八の六一八宗全八〇取意）これはもとより隆師の私説ではなく、宗祖大聖人の開目抄・本尊抄に示された報身正意論に準拠せられたものである。

然らば宗祖が開目抄に、応身・報身の顕本は今経本門の涌出・寿量の二品に限ると仰せられた応身・報身の顕本に対して、如何なる解釈をなされたかといえば、隆師は私新抄六（宗全一四三）に

当宗の本尊は報応二身に亘るや

示して云く、常住の報身、無量の尊形を顕し出世して三世の衆生を利したまふ時、断無明証中道の現世得脱の機をば常住の報身を以て之を利し、滅後三時の悪人をば応身無常転変の色相を以て之を利すべし。

其の故は報身と云ふ方は長寿にして三世倶に無作の一佛なれば常住にして無生無滅なり。此れは断惑証理の人の本尊なるべし。末代は五濁乱慢の衆生、四顚倒迷謬の機なれば無常遷滅の応身を以て生死の着執を離れしむること尤も便なれば顕本の応身を以て本尊と為すべし。……

是れ即ち報身が家の応身、常住が家の無常にして、無常常住倶時相即、随縁不変一念寂照の功徳なるべし。

と明されている。久成本佛の実体は報身であつてこの報身本佛に三身を具足している。故に三世通じて化道の始終、種熟脱の化益をなす本体は報身本佛であるが、その熟益の化道を実際になす佛は是れ本佛体具の三身の垂迹諸佛であるが、この三益の化道の中、種脱のときには常住の本佛が出生して教化をなす。在世得脱の断無明証中道の聖機に対するときは常住報身の尊形を示して之を益し、滅後下種の下機に対する場合は無常応身の相を現じて之を化す。この時の応身無常の佛とは地涌菩薩である。これ末代五濁乱慢の衆生に対する色相であるが、これも報身が家の応身、常住が家の無常の相であつて応身の応用の体が無常ではないというのである。以上が隆師の開目抄に於ける応身・報身

の顕本に対する会釈である。

さて上述の報身本佛を何故我等衆生の本尊（要法体具の別体本尊）としなければならないか。之に関して隆師は私新抄六（宗全一四二）に

口伝に云く、円宗の本尊は三身具足の報身なるべし。……報身は是れ修因感果の佛なれば総じては一切衆生の本尊なるべし。衆生の修因感果、死此生彼を離れ常住の慧命を得る手本なれば必ず長寿の報身なりと云ふなり。法身は非因非果、応身は無常の佛なる故に、末代当時の本未有善の機、修因感果、長寿証得の本尊にあらず。仍て報中論三の無作三身を以て当宗の本尊とすべき者なり。（類文、同抄六・一六四）

といわれている。「成佛と云ふは修因得果なり」（隆全八・六一八）で、衆生が佛に成るということは迷ひより悟へと修因感果しなければならない。法身は果上の理佛なる故に因果なく、応身は化他の佛なる故に自行の因果はない。修因感果の衆生に応じて因円果満せる佛は三身の中には報身でなければならない。故に報身本佛が我等衆生の成佛の手本即ち本尊となるのである。この意味に於て生佛一如の道理が成立する。以上が隆師の寿量顕本の本佛を、三身即一、本因本果の報身とする理由である。

三、報身の本因本果について

日隆聖人に於ては久遠成道の報身本佛は因果所修の佛、即ち本因本果具足の有相事佛であつて、無始の始より無終の終りに至るまで妙法蓮華経を信行し続ける常住不滅の佛なりとする。ここを経文には「我本行菩薩道所成寿命今猶未盡」といい、また「我智力如是慧光照無量寿命無数劫久修業所得」と説く。本因本果とは常修常証常顕常満といつ

て久遠劫の修行を意味する。故に本因本果といえどもこれ実には総じて本因妙の佛である。本門に於ては爾前・迹門等の一定の因行を修して佛果に至るという一辺の因果の通念を以て因と果とを切離して論ずることはできない。本因即本果、本果即本因にして本因本果は因果俱時、而もこの因果は無限に連続してゆく、この本因本果を一ケの本因妙の修行なりとするのが、隆師の教学である。

然らばこの報身本佛は久遠本時に如何なる教法を受持し如何なる修行をなされたか、それはいうまでもなく妙法蓮華経の受持・口唱・弘通の信行観であつて、一念三千証得の法行観ではない。一念三千の実相を証得せる佛は、中古天台に於ける自然本覚の因具の理佛とは異るけれども、これはやはり果上の法身であつて結局実相の理佛である。隆師所談の久遠成道の報身は常修常証、因果所歴の事佛であるから実相証得の法身佛であつてはならない。一念三千の宝珠を総摂せる総名妙法蓮華経を信行下種したまえる信心佛である。これについて隆師はかように説かれている。

仍て釈尊即ち前佛の本涅槃妙滅後末法の時、我等が如く凡夫にて初めて本因妙名字即の信位に居して観妙（信行観心の南無妙法蓮華経）を修して下種を成じ、弟子の上行に又佛種を下す。此れを久遠下種と云ふ。（弘経抄八二、隆全九の六二）

と明されている。「我本行菩薩道」の菩薩道は妙法蓮華経の信行である。従つて本佛釈尊の身相は我等が如き凡夫にして名字信位に居して自ら妙法蓮華経を信行し、また他の衆生に対して妙法を口唱し弘通せられたのであるとする。されば一言に本佛釈尊といえども本因本果の釈尊・上行は一体にして、而も本因妙の上行菩薩である。隆師は

疑ふて云く、常の釈義等には本因本果は共に本因妙を以て釈尊一佛の上の因果なりと云へり。何ぞ本因妙を以て地涌と云ふや。

答ふ、釈には「其菩薩界常修常証無始無終、報佛如来常顕常満無始無終」文。此の菩薩界は本因妙の地涌なり。報

佛如来は本果妙の釈尊なり。故に本因本果一体にして、本果の佛界より本因上行等の九界を出生して、而も九界佛界師弟同体にして、釈尊体具の本因妙上行九法界は、自性所生本有の支分、本来自性の菩薩界なり。故に一体同体の因果、父子師弟にして更に別体にあらざるなり。本果妙の釈尊も因行の時は本因妙上行なり。其の時の所化も上行等の地涌なり。本因妙最下の下位名字信行の地涌なり。地涌は九法界の総体なり。故に能化所化共に本因妙に居して而も上下の位を存するものなり。（弘経抄七五　隆全八の二一八）

と云っている。「十界具足方名円佛」であるから釈尊・上行は一体にして、その本果の辺を釈尊といい、本因の面を上行というのみで、釈尊と上行とは異体ではない。然し本因本果倶に自行化他同時である。自行本因妙の辺は地涌菩薩であり、覚他の辺に於ては釈尊の本因妙地涌の外にまた所化の地涌があるのである。この地涌は本佛釈尊自性所生の菩薩界にして本有の支分であるとせられている。（以上宗全一〇四参照）

要するに釈尊・上行は同体か異体かといえば、自行の面に於ては両者は一体であり、覚他の面に於ては両者は異体にして師弟の関係にあるというのである。

四、五百塵点の経旨について

寿量品には本佛釈尊の久遠成道を顕すに五百塵点の譬説を挙げてあるが、隆師はこの譬説に於て、中古天台の五百塵点仮説論を排して五百塵点実説論を立てている。（隆師以前に実説論を唱えた人に中山日祐師あり　宗全、上聖三九九）即ち隆師は

真実の事本とは寿量品に久遠と云ふ証拠に五百塵点を挙げて而も久遠なりと云へり。是れ真実の事本久遠なりと云

へり。（弘経抄四二 隆全五の三七）

とて、経文の五百塵点は報身本佛の実際に修行せられた歴史的経過時間にして、経には単に一ケの五百塵点を挙げているが、実はこれに無量無辺の五百塵点ありとし、これを以て報身如来の無始久遠なることを実証せられている。弘経抄八五（隆全九・二八六）に

疑ふて云く、法身は無始無終なり。報身は既に因果これあり。されば玄の七に本因妙に初発菩提心の義これありと釈したまへり。若し爾らば久遠とは云へども本因妙の初めあり。是れ始覚なり。何ぞ無始無終の久遠と云ふや。

答ふ、法身の無始無終は一代諸経に之を明す、是れ理常住にして久遠にあらざるなり。依て久遠と云ふは事に約して之を論ず、故に久遠と云ふは報応にこれあり。是れ常住不滅が上の久遠なり。譬に五百塵点を取る、所譬は報身の久遠なり。……本因妙以前に無量無辺の釈尊・上行の師弟、自体顕照の自受法楽の説法これありと雖も、自行の成道なれば名体も替らず唯是れ釈尊上行の一佛一菩薩の本因本果なり。故に能譬の五百塵数の本因妙以前に無量無辺の五百塵点これあるべし。其の中の一ケの五百塵数を経に挙げたるなり。実には本因妙以前に無始久遠の五百微塵これあり。随て無量無数不可説の本因妙の釈尊・上行の出現これあり。故に無始久遠と云ふなり。（類文、同抄一〇―隆全一〇の六五四、同抄八三―同九の一〇四、私新抄七―宗全一八七、宗要佛部―隆教一の四〇九等）

とある。報身は因果所修の佛なる故にこの佛の性格上本因妙の始があるのは当然である。本尊抄の「佛既過去不滅未来不生」の文はこの意味を顕しているのである。報身に本因妙の始がある故に「過去不生」といわずに「過去不滅」といい、報身に始があつて而も妙法を受持して以後尽未来際常住であるから、「未来不生」というのであつて、「未来不滅」というが如きは爾前・迹門の通説であり、本門の永異諸経の意ではないというのである。（私新抄七―宗全一八七 取意）

報身の本因本果というのは理成法身の如き非因非果非生非滅の常住の意ではなく、修因感果の修行の長遠なることを意味するものである。ここを隆師は「法身の無始無終は……それ理常住にして久遠にあらざるなり。依て久遠と云うは事に約して之を論ず。……是れ常住不滅の上の久遠なり」といわれている。法身の理常住は歴史的時間を超越せる絶対的永遠を意味するものであるが、報身の事久遠というのは相対的に推移し発展してゆく歴史的時間に於ける長遠である。是れ伝教大師が不変真如の凝然常住に対して随縁真如の縁起常住といわれたものに相当する。（守護国界章伝全二の五六七）

大体不変常住は相対的歴史的時間の否定であつて、実は時間の上に於ける常住ではない。真の常住とか久遠とかいうものは経過し推移してゆく時間の上の存在である。時間の上に於ける久遠であるから始めがなければならない。而もその始めは報身本佛に於ては三世常恒の上の始であつて、いつも始いつも始にして間断なき本因妙の始である。故に法身の絶対的理常住と報身の相対的事久遠とは時間に於ける量の差ではなく質の差であつて、法身は非因非果といつて因果始終を超越せる抽象観念の常住であり、之に反して報身は本因本果といつて因果始終を経過し連続せる久遠である。これが宗祖が開目抄・本尊抄に示された本因本果無始久遠の報身本佛である。

されば中古天台の如き事相修顕を否定せる無作本覚の概念を以て、当宗の報身本佛の本覚を同日に論ずることはできない。中古天台に於ける本覚は始覚の修顕を全然否定した本覚であり、当宗の本覚は始覚の修行を久修業所得した本覚であり、中古天台の無作三身は生滅始終の経過推移を全く超越した無始無終、当宗の無始無終は生滅始終を無限に経過したものであり、無為無作といつても当宗の意に於ては中古天台に異り、有為有作を無限に積重ねその究極に至らしめるものである。隆師は本覚を解して

久遠本地の報佛は本因本果を備ふる事相の尊形ながら久遠なり常住なりと説く、是れ本覚なり。報身ばかり本覚の

佛なり。報佛も之は凡夫なり、事相麁顕の従因至果の報佛の体を久遠なりと云ふ、是れ本覚なり。事は迷なり。されば事相の報佛は迷の佛なるを今経の本門ばかり久遠常住の覚悟の如来なりと云つて、事迷を改めず事佛に即して久遠と云ふ故に本覚なり。故に本覚をば事に約すと云ふべきなり。（四帖抄四刊本三〇二）

と云い、また有為を釈して

一切衆生の下種を成ずる本因妙自受用身の智慧は、無為の上の有為常住なり。此の有為とは迹門・爾前の有為とは大いに異るなり。事の久遠を指して有為と云ふ故に、理極事遍の事遍を有為と云ふ。此の有為は随縁真如なり。故に「貪体即覚体」の本覚智を有為と云ふ。此の本覚智の有為は、歌に云く、「中々に猶里近く成りにけり、あまりに山の奥を尋ねて」等と云へり。此れは無為常住の奥にある処の有為常住をよみ顕したり。（弘経抄八〇、隆全八の五七八）

といわれている。

さて五百塵点に無数の五百塵点があるから本佛釈尊の我本行菩薩道以前に前佛の本佛釈尊があり、またその前佛に本佛釈尊がある。此の如く無量の本佛釈尊があるが、これを本佛釈尊一佛の因果と見るところに、隆師の報身顕本の意義が存するのである。この意を示して隆師は

本行菩薩道時より已前、過去の過去、五百塵点の五百塵点、無量無辺の無量無辺、不可説の不可説の釈尊・上行の出世これあり。是れ皆本時自行唯与円合の自行成道なる故に釈尊・上行の外の余の佛菩薩更にこれなく、唯釈尊・上行ばかりなり。故に無量無辺の釈尊を以て本佛釈尊一佛と為し、不可説無量の上行等を以て本因妙上行等と為す。……故に本因本果の成道と云ふも一因一切因、一果一切果して無量無辺、遠々の五百塵点なり。五百塵点と云ふも東方より四方乃至十方の五百塵点不可説を譬ふる五百なり。然るを一ケの五百塵点の初なる間、寿量品には東

方の五百塵点を挙げて本因本果を譬ふるなり。本行菩薩道已前の本師釈尊より前々無数劫の本因本果の成道をば、四方十方の五百塵点を以て譬と為すべきなり。之に依て玄の七に云く、「若久成佛如二釈迦之例一以三東方一為レ譬。若久レ此者即以三四方一為レ譬。又久者十方為レ譬」と釈したまふ文義明了なり。（宗要佛部一二、隆教一の四一六）

といわれている。

以上五百塵点の前に五百塵点があり、本佛釈尊の前に前佛釈尊があつて無限の過去に遡つてゆく、而もこの無数の五百塵点を釈迦一佛の因果とすれば本佛釈尊の修行は実に無始無終の久遠に亘るのである。ここで考えられることは、然らばこの無始無終久遠の修行は一体、無数の五百塵点はいづれも同一性のもので円線形のくりかえしであるか、それとも唯一回性のもので直線形の修行であるかということである。

今それについて考えてみるならば、そのいづれでもないということである。というのは報身本佛は事の時間を経て久遠の修行をなす佛なれば、前に述べた如くその修行には始めがなければならない。その始めは三世久遠の上に於ける始めであつて、いつも始めいつも始め断絶なき無始無終の始めであるから、単なる円線形のくりかえしではない。若し同一性のくりかえしであるならば、報身本佛の修行には無限の前進も発展もなく常に信行の始に戻つてくるから信行成満の佛果を期することはできない。では唯一回性のものの連続であるかといえばそうでない。信行には聞法より信心へ、信心増進より口唱へ、一唱より二唱三唱へ、更に弘通へと進展し、遂に無数劫に連続してゆくところは正しく直線形の発展だと考えられるが、その所信所行の佛法は常に同一の妙法蓮華経であつて、他の佛法にかわるものでないから、いつも名字信位に住するのである。故に単なる直線形の修行ではない。ここを日隆聖人は

名字即は法体法位にして本地首題には義味を付けざる法爾天然の当体なり。観行即已下……分真・究竟と梯登し

て等覚の位にして妙法体内の三千三観円満して妙覚に至ると思ひてあれば、本の名字即の総持の妙悟法体、本地の南無妙法蓮華経に還帰せるなり。是れ即ち等覚一転入于名字即なるべし。（私新抄九　宗全一五八）

と明されている。そこで本佛の本因妙の信行が円線形でもなければ、直線形でもないとすれば一体それは何か、それは螺線形でなければならない。五百塵点の次にまた五百塵点、その次にまた五百塵点と連続してゆくことは最初の出発点に戻ってきたのではなく前進向上しているのである。信行が向上増進して成道するかと思えば、それは妙覚究竟の佛果に至るのではなく最初信心の名字即位に戻ってくる。しかしその最初一念の信心とは妙法蓮華経を離れない信心であるから、戻ってきたようであるが、それは初の五百塵点を踏越へ、観行・相似・分真と梯登してきた信心であるから単なる初一念の信心ではない。かように螺線状をえがいて一念の信は十百千万億と念々に進展し、従浅至深して浅信より深信へ一返の口唱より十百千万億へと進み、一人への弘通より十百千万億人へと常説法教化してゆく。この信心・口唱・弘通の功徳をまた元の初随喜名字の信心に帰して信行を増進する、これが本佛如来の「寿命無数劫久修業所得」でなければならないのである。

五、本佛釈尊は色相荘厳の佛

既に述べた如く、久遠本佛報身釈尊は本因本果事相修顕の佛にして、久遠本時に於ける本行菩薩道の時は、我等凡夫の如く名字信位に居して妙法蓮華経を信行する本佛なる故に隆師は色相荘厳の尊形佛でなくてはならないとする。弘経抄七八（隆全八、四二八）に

本門八品上行要付の末法下種の本尊は三身即一久成の報身なり。此の報身は三世常恒に本未有善の凡人に趣向して

下種を成ず、故に下種の位は名字なり。此の名字初心始行の者を以て正機と為す間、久遠下種の時の報身、法身、自受用は皆尊形の佛身なり。故に報中論三の三身にして報身一佛に三身を具す、三身共に尊形の佛身なる故に能具の報身の相好を、義を以て三に分つと沙汰すべきなり。此の本因本果の報身に音声無辺、色像無辺の相好これあり。謂く音声無辺は本因妙名字口唱の妙法なり。色像無辺は本果の上の相好なり。此の一佛身に三千を具す、更に余法、余佛の余の相好なく、唯是れ三千依正十法界周遍総持の本佛なり。此の本佛に本涅槃妙を具す。故に応佛の相好、三十二相、八十種好、八万四千の相好等をも之を具し、諸の相好を従多帰一して十法界の相好を総じ、本因本果の尊形に円備して当体蓮華を以て相好と為すなり。此の時は三身共に当体蓮華を以て相好と為すなり。此の故に蓮華を以て所坐と為すなり。（類文、同抄七九 同五〇六）

という。報身本佛は三身即一にして三身を具する、その能具の本体たる報身は色相を具した事佛なれば音声無辺、色像無辺の相好を備えた尊形の佛身である。従つて所具たる三身に於ても相好を備えるとする。三身の中報応二身はもとより事相の佛なれば相好を具することはいうまでもないが、一般に無相佛とせられる法身佛までも相好を具するのだとする。隆師は法身に於て理体法身と尊形法身との両種あり、理体法身は爾前諸経に通ずる客観的理境であるから勿論無相であるが、尊形法身は本門の報身所摂の法身にして、それ本因本果の慈父釈尊と境智冥合する悲母多宝佛であり、この多宝に相好を具するとする。（同上 四一七 取意）

法身に相好を具すといつても是れ相好の根本をいうのであつて相好の種子であるといつている。即ち境智冥合の実相に理・智の二あり、理法身の相好とは諸法の如々が従多帰一して一如一理なる辺をいい、この一如より法界の如々の多如に周遍する辺を智法身の相好とし、此の法性理智の妙境より三千の事智顕れ出でて、三千世間依正宛然自受法

楽して法々塵々各々名相を存しているところが自受用報身の相好であり、この根本種子の相好より用を縁起して能覚の尊形を顕すときに、対機機見の他受用勝劣両応の相好が生ずるというのである。（全上四二八）

さてこの三身を具する自受用報身の尊形佛は大悲深重の故に果位の自受用身より従果向因して事寂光に出で、尊形の自受用釈尊は自受法楽の妙法蓮華経を以て尊形の自受用上行に之を付嘱し、上行は末法尊形の自受用身日蓮大士に之を授け、日蓮大士は末法の本有三因たる自受用身の修顕の信者を助くるのが本門八品の儀式であるという。（宗要、佛部九隆教一の三〇五）

されば隆師は伝教大師の秘密荘厳論の「一念三千即自受用身、自受用身者出尊形」について、他師は殆んど尊形を超出せる無相佛に解しているのに反して、却つて「尊形佛は本因本果の釈尊・上行なり」として、開目抄・本尊抄・血脈抄・当体義抄等を引証して色相荘厳の尊形佛に出現した有相の事佛であるとせられている。（同上三〇六）

今私新抄六（宗全一五六）の文を引けば

仰せに云く、色相荘厳の佛に於て二意あるべし。爾前・迹門の色相の佛は無常なれば円宗の所用にあらず。本門の色相は常住なれば円宗の本尊と為すべし。……無作三身とは本門寿量品の教主常住の報身なるべし。若従別意正在報身、之を思ふべし。此の報身とは本因本果成就の佛なれば万徳円満の色相荘厳の佛果なるべき事異論なし。之を以て蓮師聖人当家の本尊と定めたまへり。在々処々の御抄分明なり。今経本門の意応身・報身の顕本之を明す。……山家大師の云く、一念三千即自受用身、自受用身者出尊形佛云云。或は吾〻此ノ法華宗ハ久遠実成道釈迦牟尼佛実報土中ノ説云云。此等の所判分明なり。色相荘厳の佛、円宗の本尊なるべしと云ふ事を。

とあり、隆師の論意よく〳〵知るべきである。只ここに「円宗の本尊」というのは、総名南無妙法蓮華経本尊体内所

摂の別体本尊（人法一体、人面法裏）であつて、本宗が釈迦・上行の人本尊を正意の本尊とする意味ではなく、「末代当時は首題を以て正体の本尊と為し、助縁助道の方は色相荘厳の佛に亘るべし」（同上一五八）であることを了解されたい。

六、久成本佛の報命は久遠

寿量品の本地三如来の寿命については、天台大師が既に

法身非レ量非二無量一、報身金剛前有量、金剛後無量也、応身随レ縁則有量、応用不レ断則無量也。……此品詮量通明二三身一若従二別意一正在二報身一

と示されている。隆師もこの義を承けて、寿量顕本は報身正意であるとせられている。宗要佛部一二（隆教一、四〇二）に事成の本は真実の本なり。是れ正在報身の顕本の本なり。此の本は佛内証の心意には約さず、佛の外相の色と身とに約して果頭開顕する報応の久遠の顕本なる故に、佛なれども外相の色と身とは事なり。此の色身の事を久遠なり常住なりと顕本する故に事成の本とは云ふなり。此の本因本果報身の外相の色身久遠常住にして長寿なりと云ふ事、更々迹門・爾前に曾て之を明さざる故に、「発迹顕本三如来永異二諸経一」とひからかし、記の九には「但未二曾説一久成遠寿一……若論二遠寿一一向須レ異」と釈し、籤の一には「本門与二諸経一一向異……所レ言異者所謂遠寿諸経永無故一向異」と判ぜり

と示されている。隆師は寿量顕本に於て理成顕本を排して事成顕本を取り、事成顕本とは本地報身の心意の常住よりも色身の久遠常住を顕すことであり、この色身の遠寿なることを顕すことが諸経永無、一向永異なる所以であるとせられた。而して隆師は報身の寿命を報命又は連持命として慧命と区別せられている。所謂弘経抄八六（隆全九、三一八）に

寿命に三あり、一には連持寿命、二には慧命なり。此の二の外に信心の寿命これあり。

とて、三種の寿命を標し、就中信心の寿命永劫に朽ちずして発心畢竟二不別して信行成満の妙覚位に至ることを説いている。尚同抄八〇（降全八、六〇七）に

日蓮宗の義に云く、円教の初住已上といふ円教に爾前・迹・本の不同あり。

然るに爾前・迹門の円教の教主既に有為の報佛にして無常短寿なる故に、連持命無常なり。随て心法の慧命も無常なり。而るに一分常住といふは法身実相の所依常の徳なり。……

本門の意は色報の連持命、久遠常住の旨を明す。疏の文に……籤の一に……。此の遠寿といふは尊形色報の報佛は連持命なり。此の連持報命の佛とは寿量の「我実成佛已来甚大久遠乃至常住不滅、我本行菩薩道所成寿命今猶未盡」と云へる本因本果の報命の報佛なり。……此の報命に即する慧命なれば慧命も久遠常住なり。……

仍て慧命常住の義は心法なる故に、爾前・迹門の諸部の円に通ずるなり。報身の連持報命常住久遠の義は曾て迹門・爾前に明さず、本門に限るものなり。此の義を顕さんが為に本迹を分ちて久遠の常無常を示すなり。（類文同上六一三）

とある。三種の寿命の中、慧命とは法身実相の寿命にして色心二法の中には心法に当り、連持命はまた報命とも称し、これ報身の寿命にして宿世の善業に報いて得たもの、これ生々世々に尽きずして未来に連持する故に連持命と名ける。これは色心二法の中には色法に当る。信心命とは報命が初住以上の色身の寿命なるに対してこれは名字凡夫の信心の寿命にして所信所持の総名南無妙法蓮華経の経力によつて永劫に朽ちずして常住となるものである。

爾前・迹門の慧命は実相の常住なるにつれて一分常住の徳はあれども、連持報命は有為報佛夢裡権果にしてその色報は無常である。随つて法身の慧命も一分常住なれども色身の無常なるにつれて結局無常に帰するというのである。

本門の本佛は三身円満の報身にして、この報身佛色報の連持報命は久遠常住であり、その所覚所証の三千実相の慧命も亦常住である。詮ずるところ久遠成道の本因本果の報身本佛の報色の身体も心法も共に久遠常住にして不滅なりと顕本することが、寿量品の正意であるというのである。されば隆師は

恐らくは連持報命の尊形報佛の、而も本因本果の十界三千円満したる釈尊・上行の師弟久遠常住なりと説くことは本門に限るものなり。故に此の報身を以て諸佛の中の根本本佛と為して第十佛界に置き三千を成ず。……此の事の三千の事は報身の報色の身体より起るなり。（同上六一四）

と仰せられているのである。

七、結

以上要するところ、日隆聖人は寿量顕本の久成本佛については、全く宗祖大士の顕本の本義に準拠して三身即一正在報身説を立てるのである。この顕本の正意は三身中報身にあり、その報身が自受用身であるとする説は隆師当時の他門流の諸師も同様であるが、これは名同義異で、その報身の内容に至っては全然別である。当時の他門流の諸師は何れも中古天台の自受用身説を襲用しているもので、決して宗祖大士発揚の顕本論に準じているものではない。宗祖が中古天台の自然本覚の放逸思想を打破して、「応身報身の顕本」就中「五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古佛」なる実修実践の報身本佛論を樹立された真義を全く無視してしまって、却て宗祖以前の中古天台の教学を鵜呑みに輸入採用したものに過ぎない。

今等海口伝抄によって中古天台の佛身論を挙げると

心賀の御義に云く、円教の三身とは無作の三身なり。無作の三身とは始めて修顕したる三身にはあらず、我等身口意の三業本来無作として三身円満の体なるを無作の三身と云ふなり。（天全本四九二）

東陽の御義に云く、……修行を待たざる前に自受用本有に住し、自体天然にして無作本有の成佛なる処を、乗ニ於如々真実之道一来成ニ妙覚一と云ふなり。本有の智が本有の理に相称ふを、智称ニ如理一と云ふなり。……従レ理名レ如従レ智名レ来とは本有常住の理を名けて如と云ひ、本有常住の智を名けて来と云うなり。全く修得始覚の報身にはあらず。（同上四九七）

即ち中古天台に於ける自受用報身とは、三千の諸法、法々塵々の自体顕照の本覚智なる処を意味するもので、結局非修非顕の自然法爾の理佛である。従ってこの理佛は法界周遍する故に一定の相好を有する佛でなく無相佛である。強いて相好ありというならばそれは法界森羅の諸法に過ぎない。

さればこの教義を受用する当時の他門徒に於ては、何れも好んで伝教大師の著とせられる秘密荘厳論の「一念三千即自受用身、自受用身者出尊形佛」の文を引証して以て自受用本佛の無相佛なることを主張するのである。

然るに日隆聖人は宗祖闡揚の寿量本佛は自然法爾の無相絶対佛でなく、五百塵点の事の時間を経過し常修常証したまへる因果所修の自受用報身なりとする。従ってこの本因本果の報佛は自然法爾迷悟未分の理即佛（天台の一帖抄天全本四〇）の如き非活動非実践の理佛ではなく、最も活動的な実践的な色相荘厳の尊形事佛であるとする。

従って本佛の寿命を論ずるに当っても他門流では法身的慧命の常住を説くが、報身の連持報命という色身の長寿を説かない。法身の慧命は事の時間を超越せる非因非果非生非滅の絶対的常住であるが、報身の連持報命は生滅因果を示現する相対的時間に於ける久遠である。隆師に於ては常住と久遠とを区別し、常住を法身の寿命とし、久遠を報身

の寿命として、法身の常住は爾前・迹・本に通ずるもの、報身の久遠は本門に限るものと説かれている。（弘経抄八降全八の一、六八〇）

上来述べて来た報寿久遠の尊形報身の本佛を以て我等末代行者の妙法信行の手本としなければならない。しかしこの報身本佛本尊は是れ第二義的本尊であつて、我等の第一義的絶対本尊は総名要法たる南無妙法蓮華経である。報身釈尊本尊は総名体内の別体本尊であることを断つておく次第である。